

Responsible Care NEWS

2014 夏季号



レスポンシブル・ケア®





日化協
第23回

定時総会が開催されました。



第23回となる日化協定時総会が、5月29日パレスホテル（東京都千代田区）にて開催されました。

総会は正会員数254名のうち、238名（委任状出席者157名を含む）の出席のもとで開催されました。

高橋会長が議長をつとめ、下記議案について審議が行われ、いずれも異議なく原案の通り承認されました。



<議案>

1. 報告事項

平成25年度事業報告、収支決算書及び財産目録の件

2. 決議事項

第1号議案 平成26年度事業計画及び収支予算の件

第2号議案 理事22名選任の件

第3号議案 監事2名選任の件

<議事>

会議開催に先立ち、議長より、日化協独占禁止法遵守ガイドラインを確認し、適法で会議を運営することが宣言されました。

報告事項

平成25年度事業報告、収支決算書及び財産目録の件

議長の指示により、西出専務理事が、平成25年度事業報告及び収支決算報告の各案は、5月8日実施の監事による監査、5月12日開催の総合運営委員会、5月14日開催の審議委員会、5月16日開催の理事会において、それぞれ承認を得ている旨を報告し、内容について説明を行いました。引き続き、監事を代表して綾部光邦監事が、5月8日に開催した監事会において平成25年度決算報告について監査をした結果、記帳等はいずれも正確であり、また経費の支出も適正かつ妥当であったことを報告しました。

第1号議案 平成26年度事業計画及び収支予算の件

次に議長の指示により、西出専務理事が、平成26年度事業計画及び収支予算の各案は、3月17日開催の総合運営委員会、3月19日開催の審議委員会、3月24日開催の理事会において、それぞれ承認を得て提案されたものである旨を報告し、平成26年度事業計画書及び収支予算書の各案について説明しました。

後、議長は本件原案どおり承認願いたい旨を議場に諮ったところ、全員異議なく原案どおり可決承認されました。

第2号議案 理事22名選任の件

次に議長の指示により、西出専務理事が、理事22名の選任につき、1名ずつ芳名を読み上げ、各人に対し、議長より原案通り承認願いたい旨が議場に諮られ、全員異議なく、下記の理事22名それぞれの選任が原案どおり可決承認されました。



記

理事 小林 喜光 (株)三菱ケミカルホールディングス
代表取締役社長

理事 浅野 敏雄 旭化成(株)
社長執行役員

理事 石村 和彦 旭硝子(株)
代表取締役社長執行役員 CEO

理事 竹下 道夫 宇部興産(株)
代表取締役社長

理事 澤田 道隆 花王(株)
代表取締役社長執行役員

理事 菅原 公一 (株)カネカ
代表取締役会長

理事 市川 秀夫 昭和電工(株)
代表取締役社長

理事 十倉 雅和 住友化学(株)
代表取締役社長 COO

理事 根岸 修史 積水化学工業(株)
代表取締役社長

理事 札幌 操 (株)ダイセル
代表取締役社長

理事 中西 義之 DIC (株)
代表取締役社長執行役員

理事 吉高 紳介 電気化学工業(株)
代表取締役社長

理事 宇田川憲一 東ソー(株)
代表取締役社長

理事 萬代 晃 日本化薬(株)
代表取締役社長

理事 池田 全徳 (株)日本触媒
代表取締役社長

理事 中嶋 成博 富士フイルム(株)
代表取締役社長 COO

理事 淡輪 敏 三井化学(株)
代表取締役社長

理事 西出 徹雄 一般社団法人日本化学工業協会

理事 井上 哲男 一般社団法人日本化学工業協会

理事 庄野 文章 一般社団法人日本化学工業協会

理事 春山 豊 一般社団法人日本化学工業協会

理事 松本 芳彦 一般社団法人日本化学工業協会

第3号議案 監事2名選任の件

次に議長の指示により、西出専務理事が、監事2名の選任につき、1名ずつ芳名を読み上げ、各人に対し、議長より原案通り承認願いたい旨が議場に諮られ、全員異議なく、下記の監事2名それぞれの選任が原案どおり可決承認されました。

記

監事 幸後 和壽 (株)トクヤマ
代表取締役社長執行役員

監事 倉井 敏磨 三菱ガス化学(株)
代表取締役社長

<閉会>

議長は以上をもって、一般社団法人日本化学工業協会第23回定時総会の全議事を終了する旨を述べ、議場にその協力を感謝し閉会を宣言しました。



一般社団法人 日本化学工業協会 小林会長就任のご挨拶

高橋前会長が務められましたこの2年間、日本経済は、東日本大震災の影響、欧州の債務危機、中国経済の鈍化等、最初の1年は相当厳しい状況でしたが、アベノミクス効果が徐々に始まり景気が回復基調に転じ、化学産業におきましても一定の改善が見られました。

このような状況の中で、当協会は、「保安事故防止ガイドライン」と「保安防災、労働安全衛生活動ベストプラクティス集」の策定など、化学産業の重要課題である「環境・安全」及び「化学品安全」に対する取り組みの更なる強化に努めてまいりました。

また、「化学の日」の制定をはじめとして化学産業のプレゼンスの向上を目標として、あらゆるステークホルダーに対して強いメッセージを発信し、その成果を着実にあげてまいりました。このように様々な施策を実行に移され、当協会の運営・発展に多大なるご尽力をいただきました高橋前会長には、皆様とともに心より感謝を申し上げます。

私もこれからの2年間、新しい執行部・体制の下で、「安全の強化と水平展開」、「イノベーションの創出と社会への貢献」、「社会とのコミュニケーションの更なる向上」、この3つをキーワードに諸課題に取り組んでまいります。

○安全の強化と水平展開

まずは、「安全の強化と水平展開」でございますが、これは「保安事故防止」、「労働災害防止」を、最重要テーマとして、これまで以上に取り組みを積極的に展開してまいります。

具体例としては、昨年策定した「保安事故防止ガイドライン」と「保安防災、労働安全衛生活動ベストプラクティス集」の会員企業・団体以外の化学企業や他業種への展開、他団体と連携した展開も積極的に図っていきたいと考えております。

また、近年発生している事故の要因の一つにあげられ

ております技術伝承・人材育成の問題に関しましても、このガイドラインを応用し活用する等の施策に取り組んでまいりたいと考えております。

○イノベーションの創出と社会への貢献

冒頭申し上げましたように、日本の化学産業は非常に厳しい状況におかれておりますが、その一方、様々なモノとサービスを作り出すことができる化学産業には、世界に変革をもたらさうするポテンシャルが無限に広がっております。これまでも化学産業は、あらゆる分野において、革新的な素材、部品を供給することで他の産業を支え、社会を豊かにするようなシステム、製品の実現に大きく貢献してまいりました。しかしながら、世界は一層複雑化を増し、また気候変動、食糧、水、生命等地球規模で解決すべき課題が山積する中で、様々なモノを作り出すことができる我々化学産業こそ、新たな「イノベーション」を生み出し、諸課題を解決に導き新たな価値を社会に提供できると確信しており、またそうしていかねばならないと思っております。

当協会では、化学産業の「イノベーション」を生み出す次世代の人材育成については、化学人材育成プログラムの選考対象を広げ、また博士課程に限らないプログラムの開発を進めてまいりたいと考えております。

○「社会とのコミュニケーションの更なる向上」

国際社会との連携としては、2015年にパリで開かれるCOP21において、2020年以降の温室効果ガス排出削減の国際枠組みが定められる予定であり、ICCA等さらにリーダーシップを発揮し、諸活動に取り組んでまいりたいと考えております。

更にOECD等での諸活動のみならず、アジア圏内において、APEC、AMEICC等の活動に積極的に参画しており、今後もこの活動を着実かつ積極的に続けてまいります。

これらの取り組みの一例として、今後、「サステナビリティ・パッケージ」をアジア各国に積極的に展開してまいります。

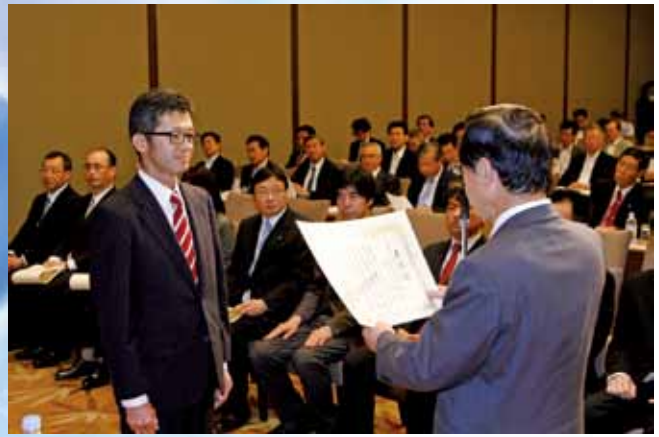
具体的には、既にアジア展開を具体的に進めていた化学品管理に加え、レスポンスブル・ケア(RC)、環境安全に関する技術や取り組みについてパッケージ化した「サステナビリティ・パッケージ」を策定し、現地当局、商工会、現地企業等と連携しながらアジア各国に展開を図ってまいります。

最後になりますが、新しい執行部体制の下で、「安全の強化と水平展開」、「イノベーションの創出と社会への貢献」、「社会とのコミュニケーションの更なる向上」に向け、これまで以上に積極的に取り組んでまいり所存です。

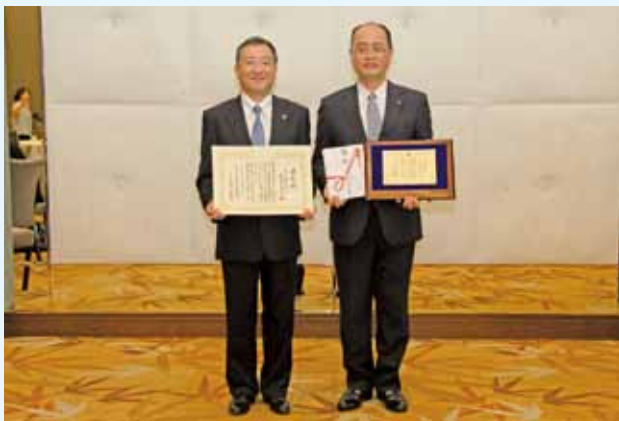
日化協会員の皆様方のご支援とご鞭撻を得て、日本の化学工業の永続的発展・飛躍のために努力してまいりますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

安全表彰、技術賞、 レスポンシブル・ケア賞の 表彰式を実施

5月29日パレスホテル東京にて開催されました日化協定時総会に先立ち、日化協安全最優秀賞・安全優秀賞、日化協技術賞（総合賞、技術特別賞、環境技術賞）、日化協レスポンシブル・ケア賞（RC大賞、RC優秀賞、RC努力賞）の表彰式が執り行われました。



今回表彰されたのは以下の方々です。



日化協 第38回安全表彰

「安全最優秀賞」

花王(株) 栃木事業場

「安全優秀（特別）賞」

昭和アルミニウム缶(株) 彦根工場

昭和電工(株) 秩父事業所

帝人デュボンフィルム(株) 岐阜事業所

日本化薬(株) 研究開発本部 医薬研究所（特別賞）



日化協 第46回技術賞

「総合賞」

(株)カネカ：PIXEO（ピクシオ）BP（ラミネート2層銅張積層板用材料）の研究開発と工業化

「技術特別賞」

(株)資生堂・花王(株)：皮膚感作性試験代替法 h-CLAT 法の開発

「環境技術賞」

三井・デュボンフロロケミカル(株)：低環境負荷（地球温暖化係数極小、オゾン層破壊係数ゼロ）フッ素系流体の世界初の商品化



日化協 第8回レスポンシブル・ケア賞

「RC大賞」

日産化学工業(株) 富山工場：ビオトープを活用した生物多様性への取り組み

「RC優秀賞」

旭硝子(株) CSR室（審査員特別賞）：リスクアセスメントの有効性向上と安全人財の育成を目指した「安全強化活動」

大塚化学(株) 生産本部（審査員特別賞）：「安全道場」設立による安全衛生教育の充実

昭和電工セラミックス(株) 富山工場：産廃埋立処分量ゼロへの取り組み

住化バイエルウレタン(株) 新居浜プラント：保安防災&労働安全

花王カスタマーマーケティング(株) 経営企画部門 環境推進室：ダイレクトな環境コミュニケーション活動の推進

「RC努力賞」

JNC ファイバース(株) 守山工場：「水」を通じた地域と企業の「共生」

(株)カネカ 高砂工業所：マテリアルフローコスト会計(MFCA)導入による総合力を活かした生産ロス改善の仕組み構築

三菱化学(株) 黒崎事業所：事業所排水の管理改善

日本化薬(株) 厚狭工場：日本化薬(株)厚狭工場の保安防災の取り組み

住友化学(株) 大分工場：大分地区におけるRC地域対話を中心とした、地域とのコミュニケーションの深化

from Members

環境調和型の製品を数多く提供し 当社の目指すべき道だと思ってい

保土谷化学工業株式会社 取締役兼常務執行役員 湯沢 和好さん

日本で初めて電解法苛性ソーダを製造

——保土谷化学の概要を聞かせてください。

湯沢 当社は1916年に株式会社程谷曹達工場として日本初の電解法苛性ソーダの製造を開始し、1939年に保土谷化学工業株式会社に改称しました。その後、時代のニーズに合わせて事業内容も変遷しています。現在は世界シェアNo.1のコピー用トナー材料（電荷制御剤）、アルミや文具用染料、ディスプレイや照明に用いられる有機EL、食品添加物等で構成される機能性色素、ホスゲン誘導体やPTG、ウレタン系防水材等の機能性樹脂、過酸化水素をはじめとする基礎化学品、更に農薬を扱うアグロサイエンスという4つの分野を中心に事業を展開しています。グループの生産・開発拠点は郡山・横浜・南陽の3工場と筑波研究所、韓国にも工場・研究所を設置しています。2014年3月期の連結売上高は約357億円、従業員数はグループで758名、単体で505名です。

——レスポンスブル・ケア導入時は、どのような状況でしたか。

湯沢 1997年のJRCC加入時に、それまでの環境保全委員会をRC委員会に改組しました。当時はISOの認証取得も進めていたので、担当者は大変だったと思います。

——人員の配置等、留意した点はありますか。

湯沢 本社にRC実行委員会を設置し、プロジェクト的な形で推進しました。最初は理念やRCコードの説明から始め、活動の定着を図りました。一方、ISO9001の認証取得は初めてで戸惑いもありましたが、ISO14001についてはRCと同時並行で比較的順調に進んだと記憶しています。当社の工場はいずれも古い歴史があるので、以前は各工場が独自色の強い環境・安全活動を行っていました。RCの導入により、全社的な取り組みとして方針及び組織・体制が整備され、統一的な管理・運営ができるようになったことは大きなポイントだったと思います。



2013年度 郡山工場・地域交流会

経営と現場の繋がりが明確に

——文書化等の具体的な作業は？

湯沢 当初は苦勞した部分もあったと思いますが、文書化する、記録に残すということは教育・訓練にも繋がると考え、内部監査等を通じて推進しました。実際、外部からの監査の際に指導を受けることがなくなり、効果は大きかったと感じています。

——社員の皆さんに意識の変化はありましたか。

湯沢 全社方針を受けて工場方針を策定し各現場単位の計画に反映する、進捗状況は本社と現場が双方向で報告・確認するという形が日常的になり、経営と現場との繋がりが明確になったと思います。またレスポンスブル・ケアは開発から製造、使用、廃棄に至るまで全ての工程に責任を持つという考え方なので、一人一人が目の前の製品だけではなく、周囲に及ぼす影響等を広い視野で捉えるようになりましたね。

——目に見える成果は上がっていますか。

湯沢 2003年に、5年間で廃棄物を半減するという目標を掲げました。当初、各工場には否定的な見方もありましたが、PDCAサイクルの中で計画・対策を見直しながら、何とか5年間で達成することができました。2013年度時点では、2003年度比79%程度の削減を実現しています。また、省エネの取り組みとして、設備更新時に省エネ型へ切り替えるとともに、燃料転換も進めました。震災以降、社会・経済情勢の変化で、コストの面での削減効果は期待できないものの、環境面では、CO₂の排出減に加え、SO_xの排出がほぼゼロになるなど十分に効果は得られました。

——労働安全・保安防災について聞かせてください。

湯沢 2012年2月に火災事故が発生し、それ以降、全ての活動の見直しに取り組みしました。現在も実作業と作業標準書の内容に齟齬がないかといった点検・修正を重点項目として実施しています。また、日化協から配布していただいたガイドラインを各工場に展開し、リスクアセスメントの見直しにも着手しています。昨年度までは件数ありきで進めていましたが、事故が起きるのは危険が抽出されなかった箇所というケースが往々にしてあるので、今年度からは中身重視に切り替えました。

活動を通じて福島になりたい

——地震・津波対策はいかがですか。

湯沢 郡山工場は内陸部に立地しており、東日本大震災では津波の影響は受けませんでした。設備には大きな被害がありました。耐震化と共に、地中の配管を地上に出し点検し易

ていくことが、 ます。



くするといった工夫を施しています。横浜工場と南陽工場は津波対策として、マニュアルの整備や避難訓練等に力を入れています。

——レスポンス・ケアでは社会との対話も重要なテーマですが…。

湯沢 夢・化学-21の子ども化学実験教室が6月に福島で開催され、当社も参加しました。「服についた汚れを落とそう」というテーマで洗濯の原理を子供たちに紹介しましたが、むしろお母様方に好評だったようですね(笑)。私も震災時は郡山に居ましたし、福島では未だに仮設住宅に住んでいる方がいらしたり、風評被害があったりするので、このような活動を通じて少しでも力になれば、と考えています。また、各工場では地域交流会を開催し、説明会・懇親会を通じて地域住民の皆様とコミュニケーションを深めています。社長も時間の許す限り、出席するようにしています。

——環境対応製品について教えてください。

湯沢 経営理念に「環境調和型の生活文化の創造に貢献します」と掲げており、環境に配慮した製品が多いのも当社の特徴です。主力製品のひとつであるコピー用トナー材料(電荷制御剤)は有害な重金属を含みませんし、ポリウレタンの原料であるバイオPTGは植物由来の非可食部分を原料としています。また過酸化水素は使用後、水と酸素になるクリーンな酸化剤であり、HCエコブルー ENは、特定化学物質を使用しておらず、人の健康に配慮した防水材です。研究・開発段階からお客様や社会のニーズを的確に把握し、時代に求められる製品・技術の提供に取り組んでいます。

グローバル・ニッチ分野で オンリーワン・ナンバーワンに

——現在、力を入れている活動は何ですか。

湯沢 「グローバル・ニッチ分野でオンリーワン・ナンバーワン素材を提供し続ける企業」というスローガンに基づき、当社が得意とする有機合成技術に注力しています。有機EL事業では韓国に連結子会社、現地法人を設立し、工場と研究所を置いています。ここではレスポンス・ケアの面でも今年を準備期間とし、来年以降、順次日本と同様の活動を推進していく予定です。国内では昨年7月に日本パーオキサイド(株)と合併し、隣接する郡山の工場では(株)ダイセルの生産革新を導入しました。これは環境・安全にも連なる活動なので是非、定着させたいですね。また、その他の事業として化学薬品を中心とした危険物の保管・物流業務を手掛けており、化学メーカーとして培ったノウハウを生かして順調に拡大しています。

——今後の目標を聞かせてください。

湯沢 レスポンス・ケアに限らず、様々な活動においてPDCAを重視してレベルアップを図っていきたくと考えています。化学物質管理についても基幹システムに組み込み最新の形で運用できるようになったので、当社の理念に基づき、環境調和型の製品を数多く提供していくことが、目指すべき道だと思っています。

——日化協に対する要望はありますか。

湯沢 お客様から化学物質のリスク評価の依頼を受けた時、フォーマットの未整備等により担当者の負担が大きかったり、お客様側も十分な情報を得られなかったりするケースが見受けられます。日化協にはリスク評価・管理システムの構築を先頭に立って進めていただきたいし、その際、新しい情報等があれば速やかに伝えていただければ助かります。



郡山地区自衛消防操法大会
2年連続最優秀賞受賞(2012年度、2013年度)



夢・化学-21「子ども化学実験教室 in ふくしま」
開催日：2014年6月14、15日
内容：「服についた汚れを落とそう」

事業所概要

日本化学工業株式会社福島第二工場は福島県郡山市から北東部に位置する三春町に立地し、敷地面積 149,000 m²、従業員約 100 名で無機、有機化学工業製品を製造しています。1924 年、豊富な河川水を利用した水力発電により電力を供給し、黄燐、燐酸の製造から操業を開始しました。以後、現在に至るまで燐に特化した工業製品の製造を行っています。それら製品群としては農薬原体、赤燐系難燃剤、電子材料用途のドーピングガス、医薬中間体などがあります。社会ニーズに応えるべく多種多様の製品をラインアップし、国内外のお客様へ提供しています。組織は製造、開発部門を中心に事務、品質保証、検査部門から構成され、あらゆるご要望に対し、お客様第一主義の精神で対応を行っています。



工場全景
(枠線内が事業所敷地)



事務所棟

レスポンシブル・ケア活動

〈安全活動〉

当工場は 2001 年の ISO14001 取得後、労働安全衛生、製品安全、環境保全、保安防災等の RC 活動を充実させています。月次の安全衛生委員会では作業環境測定結果の報告や安全衛生パトロール実施結果と指摘事項の是正確認ならびに水平展開を図り、安全意識の向上を図っています。また、労働安全衛生法に基づいた 13 の専門委員会を設置し、専門分野に特化した個別委員会も毎月開催しています。ここでは法改正状況の説明や高度な専門的教育を実施し、その内容は各職場の職場会にて報告、周知されています。

定修時等の非常作業時には工場規定で定められた作業チェックシートに基づく KY 活動の実施、RA 活動、その他遵法性を確認し、安全第一での作業に重点を置いています。

〈保安防災〉

場内では消防法で規定される危険物を数多く取扱っています。自衛消防隊は毎月、自主的な訓練を行っています。また、郡山消防署、田村消防署のご協力をいただき、工場、消防機関との合同消防訓練も実施しています。訓練結果は消防機関より文書で報告され、その反省事項を従業員全員が共有し、次の訓練に繋げレベルアップを図っています。



消防署との合同消防訓練

〈環境保全〉

環境方針に基づく行動指針を遵守した事業活動を行っています。特にエネルギーについては省エネルギー推進委員会にて定期的に省エネパトロールを実施し、エネルギーロスの低減活動を行っています。また使用原材料に関しては、人、環境に影響を与える有害化学物質の含有等についての各種情報を入手し、お客様からの情報開示の要求に速やかに対応できるようデータベース化を進めています。工場事業活動により排出される産業廃棄物の低減は工場全体の重点目標として掲げ、製造工程の改善や再利用、資源化に努めています。

地域とのコミュニケーション

毎年、工場近隣住民を代表する区長様、町役場関係者様にお集まりいただき、環境保全連絡協議会を開催しています。皆様のご協力をいただき、今年で 11 回を数えるに至っております。ここでは、当工場の事業活動で消費したエネルギー量やそれに伴い発生した大気汚染負荷物質排出量、排水水質状況等について報告を行っています。また、住民の皆様からの要望等についても意見交換を行い、コミュニケーションを深め、風通しのよい地域に密着した工場運営を行っています。



第 11 回環境保全連絡協議会

京都工場の概要

三洋化成工業株式会社京都工場は、1949年に三洋油脂工業株式会社設立と同時に界面活性剤の生産を中心に操業を開始しました。その後潤滑油添加剤などへ生産を拡大し、現在は将来大型商品に育成する開発品、新製品のスケールアップや技術的な検討などを行うパイロットプラント的な役割も担っています。

敷地面積約2万㎡、従業員数約100名、京都の市街地に立地するため、防災活動・環境保全活動に特に力を入れ取り組んでいます。



京都地区全景

レスポンシブル・ケア活動

<環境保全>

1996年の「日本レスポンシブル・ケア協議会」への参加を機に、より積極的な環境保全活動に取り組み、2000年にはISO14001の認証を取得しています。2006～2007年当時、生産量増等による廃棄物増大が問題となり、社内のチャレンジ制度^(※1)を利用した廃棄物削減に取り組みました。この活動で2013年日本化学工業協会のRC賞を受賞しています。

京都の市街地にあることから、臭気・騒音の対策にも力



VOCガス吸収装置

を入れています。各プラントへのVOC除去装置の設置は2010年に完了しました。また、騒音対策として防音壁設置、夜間の電動リフト使用、自作マフラーを取りつけてのエアブロー実施等を行っています。

※1：社員がチャレンジ目標とチャレンジ期間を自主申告して社長と契約を交わし、目標達成にチャレンジする制度。成功時の報奨、失敗時のペナルティーも自主申告します。

<保安防災>

日本化学工業協会がとりまとめた「保安事故防止ガイドライン」を参考として、潤滑油添加剤製造プラントをモデルにリスクアセスメントを行い、リスクの特定、分析、評価を行いました。

化学プラントでの大規模な事故が増加傾向にありますが、これらの事故は当社でも起こりうるものであり、当社の実情をあらためて把握した上で、必要な対策・改善策を実行に移しています。モノマー類の保管・取扱については対策を完了し、さらに保守・点検作業中の事故防止についても、ルールや運用などの見直しを実施中です。

<労働安全衛生>

「徹底」と「相互啓発」を合言葉に、安全衛生委員会を中心に、ヒヤリ・ハット、KY活動等を通じて災害の未然防止に努めています。

安全確保のための施策としてイエローカード、グリーンカード制度を設けています。イエローカード制度は、工場で働く従業員が、互い互いがルールを守っているかチェックし合い、ルールに則っていない行為・行動に気付いた時には、その内容を黄色い紙に記入して注意を促すことによりルール順守の意識高揚を図る制度です。逆に模範的な行為・行動を示した社員にはグリーンカードを発行することでモチベーションを上げ、相互啓発しています。

地域とのコミュニケーション

住宅地に隣接した工場であるため、臭気・騒音・振動などの対策に取り組むとともに、地域社会とのコミュニケーションに積極的に取り組んでいます。

近隣住民の方々と地域モニター会議でご意見をいただくとともに、地域の消防隊と合同で訓練を行うなど、地域と連携した活動を行っています。



合同消防訓練

日化協シンポジウム 2014

当協会は2014年6月2日、経団連会館（東京都千代田区）にて「日化協シンポジウム2014」を開催しました。当シンポジウムは、当協会と会員、また、会員同士のコミュニケーションを通じて“化学産業のプレゼンス向上”を図ることを目的に、昨年より実施しています。

シンポジウムでは、ベストプラクティスの共有を目的に、「安全賞」「レスポンシブル・ケア賞（以下RC賞）」「技術賞」の各賞総評と受賞講演が行われました。続いて、保安防災をテーマにした特別講演およびパネルディスカッションを実施しました。特別講演はデュポン株式会社の田中能之社長による「デュポンにとっての安全とは」、出光興産株式会社の松下取締役による「出光の安全」の2講演を行い、パネルディスカッションは「経営的視点から見た安全への取り組み」をテーマに東京大学の田村昌三名誉教授をモデレーターに、特別講演講師のお二人と当協会の春山豊常務理事をパネラーとして行いました。また、シンポジウム終了後には懇親会を開催し、交流を深めました。なお、来場者数は192名でした。

◆各賞受賞講演

「安全賞」は、安全表彰会議議長の東京大学・田村昌三名誉教授からの総評の後、最優秀賞の花王株式会社栃木事業場、優秀賞の昭和アルミニウム株式会社彦根工場、昭和電工株式会社秩父事業所、帝人デュポンフィルム株式会社岐阜事業所、優秀特別賞の日本化薬株式会社研究開発本部医薬研究所による受賞講演が行われました。

「RC賞」は、RC賞審査会議議長の東京大学大学院・平尾雅彦教授からの総評に続き、大賞の日産化学工業株式会社富山工場、優秀賞の旭硝子株式会社CSR室、大塚化学株式会社生産本部、昭和電工セラミックス株式会

社富山工場、住化バイエルウレタン株式会社新居浜プラント、花王カスタマーマーケティング株式会社経営企画部門環境推進室による受賞講演が行われました。

「技術賞」は、技術賞審査会議議長の東京大学・御園生誠名誉教授からの総評に続き、総合賞の株式会社カネカ、技術特別賞の株式会社資生堂、花王株式会社、環境技術賞の三井・デュポンフロロケミカル株式会社による受賞講演が行われました。

◆特別講演

デュポン株式会社の田中社長からは、1802年の米デュポン創立以来継承されている企業理念とも呼べる価値体系「コア・バリュー」に安全の姿勢が示されていることが紹介されました。安全が取り組むべき最重要課題ではなく、普遍的な基盤であることを強調されました。また、出光興産株式会社の松下取締役からは、出光興産の安全に対する考え方や体制などが説明されました。社内の危機事例などを社内のネットワーク上で公開し、情報の共有化、対応、水平展開の進捗を管理する取り組みを紹介されました。

◆パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、特別講演講師のデュポン株式会社田中社長、出光興産株式会社松下取締役に加え、当協会の春山常務理事がパネラーを、東京大学田村名誉教授がモデレーターを務められ、「経営的視点から見た安全」をテーマにそれぞれの立場から意見を交わしました。田村教授は、「最近の産業安全に関して非定常時の判断といった現場力の低下が問題視されている」と指摘。田中氏は「経営的視点から現場力を強くするには月例の安全会議や安全教育に対して経営者自らが率先して参加し安全指導を繰り返すことが重要である」と強調しました。松下氏は「事故はネガティブなことであり、隠したくなる。隠さない風土が安全文化を作る基盤になる」との認識を示しました。春山氏は「今回の安全表彰受賞者の講演で共通しているポイントは、日々の積み重ね」と述べ、継続の重要性を語りました。そのほか、討議では、安全を担う人材育成やグローバル展開における保安安全など議論は多岐にわたりました。



6月2日に「第8回レスポンスブル・ケア賞」の受賞講演が行われました

6月2日経団連会館にて開催の「日化協シンポジウム 2014」において、第8回レスポンスブル・ケア賞・RC大賞を受賞された日産化学工業(株)およびRC優秀賞を受賞された5社の各代表の方々から受賞講演(活動内容の紹介)が行われました。



賞名	受賞者	受賞テーマ	活動内容要旨
RC大賞	日産化学工業株式会社 富山工場 鶴田利彦、加藤宗義、 島口 悟	ビオトープを活用した生物多様性への取り組み	工場に隣接する遊休地(6,500㎡)にビオトープ(名称:日産ビオパーク)を作った。近隣住民に開放し憩いの場とすると共に、生物多様性を学ぶ場として近隣の小学校や保育園と一緒に地域固有のメダカ放流等を行った。
RC優秀賞 (審査員特別賞)	旭硝子株式会社 CSR室 高岡弘幸、田中清志、 黒田明寿	リスクアセスメントの有効性向上と安全人財の育成を目指した「安全強化活動」	職場の第一線の監督者から「安全中核要員」を選抜して、漏れなく危険源を抽出できる等、職場のリスクアセスメントのレベルを上げる活動を実施して、安全に対する技術とスキルを有する人財を育成する「安全強化活動」を2009年から5年間にわたって進めてきた。
	大塚化学株式会社 生産本部 岸野賢士、小笠篤志	「安全道場」設立による安全衛生教育の充実	従事者の労働安全衛生を確保するための教育の場を「安全道場」と銘打ち2012年に設立した。過去の労働災害を負の財産とし二度と同じ過ちをおかさないために、この「安全道場」にて各員の安全意識の向上を図っている。
RC優秀賞	昭和電工セラミックス株式会社 富山工場 黒田 豊、四家孝一、 佐伯達雄、矢田輝明	産廃埋立処分量ゼロへの取り組み	産業廃棄物の削減および最終埋立処分量の削減に2002年から取り組み、2007年にゼロエミッション(最終埋立処分量が総発生量の1%以下)を達成した後、2011年には最終埋立処分量ゼロを達成した。
	住化バイエルウレタン株式会社 新居浜プラント 河田 格、荒木泰輔、 馬場真一、上山信宏、 古賀隆幸	保安防災&労働安全	新居浜プラント製造工程では、有毒ガスのホスゲン、危険物の酸化プロピレン・酸化エチレンなどを大量に取り扱っているが、日頃の地道な保安防災活動と労働安全衛生活動により、1996年以来17年連続・340万労働時間完全無災害を達成している。
	花王カスタマーマーケティング株式会社 経営企画部門 環境推進室 山本裕三、磊晋一郎	ダイレクトな環境コミュニケーション活動の推進	2009年の「花王環境宣言」を受けて、消費者、お店、地域の行政(自治体)とともに地域社会と企業が協働して、「節水、節電、ごみ削減」のための環境コミュニケーション「いっしょにeco」活動を推進している。

受賞講演



日産化学工業 鶴田さん



旭硝子 高岡さん



大塚化学 岸野さん



昭和電工セラミックス 黒田さん



住化バイエルウレタン 小野さん



花王カスタマーマーケティング 山本さん

平成 26 年度安全シンポジウムを開催

花王株式会社

栃木事業場（山下 工場長）

- 栃木事業場は昭和 50 年に操業を開始し、主要製品として生理用品や紙おむつ、そうじ用紙製品を生産しており、過去に品質、環境の ISO を取得しました。
- 事業場は東京ドーム約 4 個分の広大な敷地に立地し、従業員数は約 1,100 名です。
- 安全活動としては、安全のための人と職場づくり、作業と設備安全化を目指して、平成 4 年より潜在リスク撲滅のための活動を展開しています。第 1 期よりスタートした活動も現在では第 3 期に入っており、教育体制のサニタリー全工場への展開、機械リスクアセスメントの導入を活動の柱に据え、「安全は何よりも優先される」を基本原則に、「自分の体は自分で守る。そして仲間の身も守る」並びに「決めたルールは必ず守る」をモットーに、安全活動に取り組んでいます。



昭和アルミニウム缶株式会社

彦根工場（森口 工場長）

- 彦根工場は全国に 3 つある生産拠点のひとつであり、アルミニウム缶体を製造しています。
- 製造工程には回転機器やシリンダ等の駆動機器がたくさんあり、過去 10 年間の災害データより、災害の特徴は、型別では「挟まれ・巻き込まれ」が、部位別では「手」が最も多いということです。
- 安全活動としては、不安全行動の撲滅のために、「ご安全に」の挨拶や安全目標と評価、体感教育、リスク診断等の各活動に、不安全箇所抽出・改善と設備の本質安全化のために、職場安全パトロールやヒヤリハット抽出活動等の各活動に取り組んでいます。そして、「安全に強い職場と人づくりを通して自分たちの安全は自分が守る！」という強い意志を持って完全無事故無災害を目指しています。



昭和電工株式会社

秩父事業所（遠藤 事業所長）

- 秩父事業所では化合物半導体とレアアース磁石用合金等を製造しており、過去に品質、環境の ISO を取得するとともに、安全関係では日化協安全努力賞を受賞しています。また最近では、労働安全衛生マネジメントシステムの認証も取得しています。
- 災害の特徴は、製造工程の違いから、化合物半導体製造では有害物接触（薬傷）や切創災害が、レアアース製造では激突や挟まれ・巻き込まれ災害が多いという傾向があり、共通的には火傷・熱傷、転倒災害が多いということです。
- 安全活動としては、「安全総合力を高め無災害継続で安心して働ける事業所」を目指して、ヒヤリハット抽出や安全朝ビラ・あいさつ運動等の安全意識改革活動、「創る安全」活動やリスクアセスメント等のリスク低減活動、さらには疑似体験による教育活動等を展開しています。



平成 26 年度の第 38 回日化協安全最優秀賞、安全優秀賞が決定し、6 月 23 日に安全シンポジウムを発明会館（東京虎ノ門）にて開催しました。

帝人デュポンフィルム株式会社

岐阜事業所（田口 事業所長代理）

- 当社は帝人 60%、デュポン 40% 出資の会社で、岐阜事業所には、PET フィルムや PEN フィルムを生産する工場とともに R&D センターも併設されています。無災害記録として、平成 19 年以降、休業無災害労働時間 594 万時間を達成しています。
- 共生型（自分の安全 & 仲間の安全）とボトムアップ活動を推進する上で、PLAN、DO、CHECK、ACTION の PDCA サイクルを回して活動に取り組んでいます。
- 安全活動として、一人ひとりが自ら考えて行動することとチームへの意識向上を目指す日々起承転結活動や労働災害を活用する先取り安全活動、過去災害再現ビデオ作成、さらには資格取得や特別教育受講にも力を入れています。



日本化薬株式会社

研究開発本部 医薬研究所
（市川 執行役員研究所長）

- 当研究所の前身は 1945 年に設立され、その後組織の変遷を経て現在に至っています。当研究所では抗がん剤を中心とする医薬品の研究開発を行っており、安全活動には東京事業区の一員として取り組んでいます。
- 安全意識はトップダウンからという考えの下、所長からチーム長への明確な指示と各チームが自ら考えて安全対策を実施するということが活動のポイントです。
- 安全活動としては、事故の未然防止や危険意識の水平展開を図るための環境安全衛生パトロールの実施、リスクアセスメントの推進、安全宣言、さらには、関連法令や標準化学実験操作法等の教育や技術移管時の安全対策、試薬管理DBの適切な運用等といった研究所特有の活動にも取り組んでいます。



パネルディスカッション



事例紹介に続き行われたパネルディスカッションでは、田村安全表彰会議議長の司会で、事例発表いただいた各事業所代表と日化協・春山常務理事がパネラーとして参加し、「いかにして無災害を継続するか」についてご討議いただきました。始めに、最近の化学工場の事故について、春山常務理事より保安事故防止ガイドライン、ベストプラクティス集等の日化協における保安防災への取り組み状況の紹介があり、続いて討議に移りました。

討議では、事業所トップとして安全に関し注力していることはなにか、これまで無災害を継続できたポイントはなにかについて、さらには、安全文化醸成の観点から、人材育成の取り組みと課題、コミュニケーションの取り組みと課題について意見交換されました。

続いて、会場からのアンケート質問に対し、安全に関するトップの考え等についてご紹介いただきました。会場からたくさんの質問をいただきましたが、特に、安全活動のやらされ感の克服やトラブル発生時の原因調査対応、体験教育について、見える化の工夫等、現場の活動に直結した質問が出され、各パネラーから貴重なご意見を伺うことができ、大変有益な場となりました。

ディスカッションの結びに、春山常務理事より討議全体に対する感想と今回のディスカッションでの共通項として「継続」の重要性が挙げられました。最後に田村議長から閉会の挨拶と企業における保安防災、安全の重要性とさらなる安全成績の向上への期待について有意義なお言葉をいただき、全員で安全活動の重要性を再認識し閉会となりました。



RCLG 会議



会場風景

春の定例RCLG(レスポンシブル・ケア・リーダーシップグループ) 会議が、2014年5月7日(水)、8日(木)の2日間、米国マイアミのインターコンチネンタルホテルで開催されました。

今回のRCLG 会議の重要議題は、① RC 世界憲章改訂、② キャパシティ・ビルディング(能力開発)活動、③ 中国及びインドにおける活動紹介、④ プロセス安全指標、⑤ RC 活動状況調査報告でした。概要は以下の通りです。

① RC 世界憲章に関しては、直前に行われたタスクフォースで最終的な文案を確定したとの報告がありました。一部の文言の解釈について参加者から意見はありましたが、この文案で5月29日に東京で行われる ICCA 理事会に提案することとなりました。(その後、ICCA 理事会で正式に承認され、ICCA 加盟の各国化学工業協会各社の代表者に署名をお願いする活動を始めます。)

② キャパシティ・ビルディング(以下CB) 活動に関しては、南アフリカの協会の RC 活動や、UNEP(国連環境計画)と ICCA の連携によるケニアとガーナにおける CB 活動が紹介されました。

③ 中国の RC 活動に関しては、

ICCA から5社、中国から7社の CEO が参加した対話が2014年3月に行われ、2015年のRCLG 加盟を目指すことが紹介されるとともに、2009年に設立された天津市郊外の Nangang 工業区の RC 活動に関するプレゼンテーションが行われました。また、インドの ICC から RC 活動の現状について報告が行われました。

④ プロセス安全指標(以下 PSM) に関しては、電話で参加したタスクフォース議長より、漏洩事故に関してその分類方法と各カテゴリーで報告すべき対象となる下限量の部分が合意に至っておらず、6月下旬にドイツで再度タスクフォースの会合を行い、10月のRCLG 会議に具体

的な提案を行いたい旨の報告がありました。これに対し、日化協から、現状の簡単な KPI (Key Performance Indicator) でも報告ができていない国がある現状を踏まえ、途上国や中小企業でも報告できるような簡略な PSM にすべきという意見を述べ、また、APRO(アジア・パシフィック RC 機構) 議長からも、アジア諸国の協会も報告できるような簡略、かつメリットがある報告内容にすべきであるとコメントされました。

⑤ RC 活動状況

2012年の KPI の報告状況について、47 協会中 10 協会がまだ報告を完了していないとの報告がありました。欧州については、まだ東欧を中心に報告を完了していない協会があるとのことでした。

なお、次回の RCLG 会議は2014年10月にイギリスのロンドンで開催される予定です。



会場となったインターコンチネンタルホテル(マイアミダウNTOWN)



会議参加者



APRO
会議風景



参加メンバー

APRO 会議と カンボジア RC 普及セミナー

APRO（アジア・太平洋レスポンシブル・ケア機構）定例会議を、ベトナム中部のダナンにおいて、AMEICC（日・ASEAN 経済産業協力委員会）の日程に合わせて2014年6月18日（水）に開催しました。

今回のミーティングには、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピン、韓国、ミャンマー、ベトナム、日本（議長協会）の9協会が参加し、プロセス安全指標（PSM）タスクフォースへの対応、日化協のプロセス安全支援、RC世界憲章などについて活発な議論が行われました。

PSMタスクフォースへの対応に関しては、日化協からこれまでの議論の状況を説明しつつ、途上国にも実施可能な指標となるよう努力したい旨の方針を表明しました。これに対し、多くの参加国から、指標はGHS（化学品の分類および表示に関する世界調和システム）に準拠したシンプルなものとし、また、実施にあたっては時間的猶予の考慮や教育訓練などの支援プログラムの策定を行うことを希望する旨の意見が出されました。これを受けて、日化協は、翌週にドイツのフランクフルトで行われるタスクフォース会議においてこれらの意見を極力反映することを約束するとともに、その後の本件に関するRCLGでの議論にAPROメンバーが積極的に参加することを促しました。

日化協のプロセス安全支援については、新たに日化協内で発足した「サステナビリティ・パッケージ・タスクフォース」を通じ、新たにAPROに加盟した国やプロセス安全の向上が必要と考えられる国の協会に対し優先的に支援を行っていく旨を表明し、今後、具体的な支援方法について個別に各国と相談していくこととなりました。

RC世界憲章については、署名のスケジュールや手続き等について質問があり、日化協からRCLG事務局における準備状況について説明しました。

APRO会議の翌日の6月19日（木）には、カンボジアにおいて日化協とカンボジア政府共催のRC普及ワークショップが開催され、政府関係者、民間合わせて約150名の方々が参加されました。

同ワークショップには、カンボジア政府から産業・手工業省上級大臣のCham Prasidh閣下がご臨席され、国歌斉唱で始まり、大臣からは、カンボジアにおけるRC活動の意義とRC活動普及への決意を交えながら20分にもわたる熱い開会挨拶をいただきました。

その後、岡野APRO議長（RCLG副議長）および日化協の2名の講師により、「RCとは何か」（日化協）、「マクロの視点から見たRCの意義」（岡野議長）、「日本でのRC活動実施例」（日化協）の3件の講演を行い、参加された皆さんは熱心に聞き入っていました。

実際にカンボジアでRC実行組織が立ち上がり、RC活動が普及するまでには、まだまだたくさんやるべきことがあります。日化協としては、同じ大メコン圏の国々であるミャンマーやベトナムと同様に、カンボジアのRCLG加盟に向けた活動を全力で支援する所存です。



カンボジア
セミナー会場
のホテル



セミナー講師、政府関係者



INTERNATIONAL
COUNCIL OF
CHEMICAL
ASSOCIATIONS

ICCA理事会、 シンポジウムを開催

アジア地域では初となる国際化学工業協会協議会 (ICCA) の理事会を、5月29日にパレスホテル東京 (東京都千代田区) で開催しました。世界の主要化学企業15社のトップが集まり、各国共通の課題の解決に向けて化学産業の果たすべき役割について議論しました。例年欧米で開催されてきた理事会の東京での開催は、世界の持続的な発展に貢献する化学産業の重要性をグローバル社会に日本から発信する絶好の機会となりました。ホストを務めた当協会はこの機をとらえ、前日の28日に「日化協特別セミナー」を、同日の29日に「ICCAシンポジウム」を開催しました。

両日併せて来場した約750名に上る聴衆を前に、世界の化学企業トップが“化学は21世紀に何を目指すべきか”をテーマにメッセージを発信しました。

日化協特別セミナー

5月28日、翌日の「ICCAシンポジウム」の開催に先立ち、「化学産業にとっての持続的発展とその課題」をテーマに日化協特別セミナーを日経ホール (東京都千代田区) で開催しました。同セミナーでは、実際にICCAの主要なワーキンググループで議長を務めるソルベイ社のハンス・ユルゲン・コルテ産業・政府関係担当部門長、BASFのマーティン・カイザー上級副社長、ダウ・ケミカルのマイク・ウィットコーポレートディレクター、三菱ケミカルホールディングスの大塚重徳顧問がそれぞれ持続的発展に向けた取り組み事例を紹介しました。

ICCA理事会

理事会では、エネルギー問題や気候変動、健全な化学品管理など、持続可能な発展に向けて世界の化学産業が抱える共通課題について活発な議論が交わされました。

<主な内容>

◎レスポンシブル・ケア世界憲章の改訂を決議

改訂版では革新的技術の開発や提供を通じて“サステナブルに一層貢献する”ことに重点が置かれたほか、化



学物質の国際的な管理を強化する方向性も打ち出されました。

◎新興国や発展途上国に対するキャパシティ・ビルディング活動の進捗報告

化学工業の業界団体がまだ結成されていない新興国や発展途上国において、化学品のリスク評価や適正管理を行うための専門知識の伝播と能力開発を行う「キャパシティ・ビルディング」活動を、国連環境計画 (UNEP) と共同して進めていくことが合意されました。

◎「ICCAのエネルギー政策指針」「20年以降の地球気候変動枠組みに関する15年国際合意への提言」の2つのポジションペーパーの採択

気候変動については、2015年末にパリで開催されるCOP21で、2020年以降の温室効果ガス削減の新たな国際取り決めについて合意されることが予定されています。ICCAではCOP21での議論の前に、化学業界の意見を各所で主張していく予定です。



③



④



⑤

ICCAシンポジウム

冒頭の基調講演では、ノーベル化学賞受賞者で理化学研究所理事長の野依良治先生が社会における化学の重要性を示すとともに、イノベーション創出には人材育成と国境を越えた連携が欠かせないと説かれました。続いて「化学は21世紀に何を指すべきか」をテーマにパネルディスカッションを行いました。当協会の小林喜光会長（三菱ケミカルホールディングス社長）をはじめBASFのクルト・ボック会長、ダウ・ケミカルのアンドリュー・リバリス社長兼CEOなど、欧米、アジア、中東の化学企業トップ5名のパネリストに、東京理科大学の伊丹敬之教授をモデレーターに討議を行いました。ディスカッションでは、今後の成長戦略における障害とそれを乗り越えるための化学業界における国境を越えた協調などについて議論しました。人口増加やそれ

に伴う都市化や食糧問題、人材の確保や育成、化学産業の活動の社会への認知不足などが議題に上がりました。化学産業は多くの産業に素材を提供する重要な役割の担い手としてソリューション開発を加速させなければならないこと、顧客、地域、社会、政府などとの相互理解を深めるコミュニケーションがより一層必要であることなどの共通認識が示されました。

シンポジウムの最後には、茂木敏充経済産業大臣がご挨拶され、「化学にはあらゆる課題を解決する力がある」と化学産業のイノベーションへの強い期待を示されました。

- ① ICCA 理事会
- ② 特別セミナー
- ③ ICCA シンポジウム集合写真
- ④ 野依先生講演
- ⑤ パネルディスカッション

GPS / JIPS 推進キャンペーン

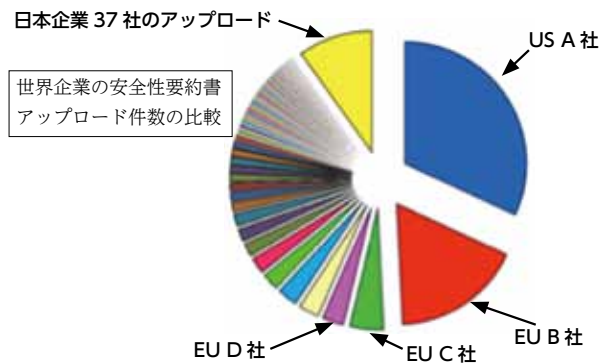
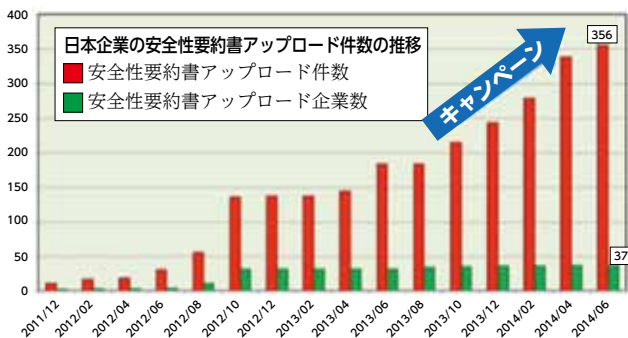
日化協会におかれては 2011 年 4 月より本格的に安全性要約書のアップロードを中心に GPS / JIPS 活動に取り組んでいただいております。本取り組みを一層支援・推進するため、日化協では 2013 年 11 月に化学品管理委員会の承認を受けて 2013 年 11 月～2014 年 4 月の期間で GPS / JIPS 推進キャンペーンを実施いたしました。

本キャンペーンはトップダウン/ボトムアップ両面から、なお一層の GPS / JIPS 推進を図ることを意図したものです。トップダウンの観点から、GPS / JIPS 推進担当者任命の再要請 (2013 年 11 月)、化学品管理委員会における会員企業の取り組み内容の紹介 (2014 年 2 月)、経営層向けパンフレット作製 (作業継続中)、ボトムアップの観点からは、協会会員向けにリスク評価支援システム「JCIA BIGDr」の公開 (2013 年 8 月)、四日市と広島での GPS / JIPS セミナー (導入編) の開催 (2013 年 11 月、12 月)、および混合物のリスク評価手法の検討

(2014 年 6 月、ワークショップ開催 [☞次コラム参照]、化学品ごとのコンソーシアム活動支援、ヘルプデスクの設置・運用を実施しました。

化学品のリスク情報の一般公開は GPS / JIPS 活動の基盤となるものであり、安全性要約書の ICCA ポータルへのアップロードによって実現されます。下記の図からおわかりのように、キャンペーンを通じての会員企業のご尽力によってアップロード件数が飛躍的に増加いたしました。しかしながら、世界の化学業界との比較では、日本企業の寄与率は全体の 9% 弱と日本の化学産業規模からみてより一層の活動推進が望まれるところです。

上記活動の中で協会会員各位からいただいたご意見を踏まえて、日化協としては今後とも GPS / JIPS 活動を一層推進してまいりますので、ご理解・ご協力のほど宜しくお願いいたします。



GPS / JIPS 混合物リスク評価ワークショップ

2014 年 6 月 4 日 (水) 日化協がある住友六甲ビルにて GPS / JIPS 推進部会評価技術 WG 主催で標記ワークショップを開催し、会員会社・団体から担当者や専門家 80 名 (54 社・団体) が参加されました。

これまで、評価技術 WG では、日本語版の“JIPS リスクアセスメントガイダンス”を出版するなど、会員の皆様の GPS / JIPS 活動を支援してまいりました。

一方で、会員の皆様からは、製品の多くが混合物であることから、混合物のリスク評価ガイダンス作成への要望が多く寄せられておりました。現在、国際的に確立された混合物のリスク評価手法は未だなく、また ICCA でのガイダンス作成も進んでおりません。

そのような状況を踏まえ、評価技術 WG では、会員の皆様へのご要望に応えるべく、2013 年度より GPS / JIPS 活動の中で混合物リスク評価手法の検討を重点テーマに取り上げ、混合物評価に関する動向調査や事例調査を行い、より実用的な評価手法の開発を進めてまいりました。

未だガイダンス作成までは至っておりませんが、今回のワークショップでは、現在検討している評価手法を細原 WG 委員からご紹介するとともに、最近の混合物評価

に関する国内外の情報を化学物質評価研究機構の宮地氏と長谷 WG 委員からご紹介いたしました。

ワークショップ終了後には、講師と出席者の皆様との情報交換や課題共有の場として交流会を開催し、多くの参加者から熱心なご質問やご意見をいただきました。

今後、アンケートや交流会でいただいたご質問とご意見を推進部会・WG での議論に反映させ、早期のガイダンス作成に向けて取り組んでいきたいと考えております。

発表資料は下記ウェブサイトに掲載しましたのでご覧ください。

<http://www.nikkakyo.org/gps-jips/materials>



サステナビリティ・パッケージのアジア展開 — 新アセアン支援活動 —

近年、アセアン地域はその急速な経済発展や人口増加に伴って、各種工業製品や日用品の製造拠点としてのみならず、その消費地としても年々存在感を増しており、多くの日本企業が進出しています。化学産業においても、アセアン地域で製造された製品は、サプライチェーンの川上から川下にわたって欠くことのできない重要な一角を占めるに至っています。一方で、アセアン各国の経済進展の度合いには国毎で大きな差があり、日化協が関わるキャパシティ・ビルディング活動においてもそのニーズは各国間で異なります。そこで、日化協は、同地域の支援活動により継続的・効果的に貢献するために、日化協サステナビリティ・パッケージ (SP) プログラムを立ち上げました。

このプログラムは、これまでに日化協 RC 推進部、化学品管理部および環境安全部が個別に行ってきた支援活動を一体的に運営し、アセアン各国のニーズに即した支援を効果的に実施することを目的としています。具体的には、各々が所有する教育資源をカタログ化して一元管理し、これを各国のニーズに基づいてパッケージ化し、それをベースにして支援プログラムを策定し、各国の異なるニーズに的確に対応していくことを目指しています。

日化協では、このプログラムの実施に向けて、2013年4月より検討を開始し、アセアン各国で実施した各種研修におけるアンケートや、現地化学工業協会および行政当局へのヒ

ヤリングを通して準備に当たってきました。今春には、実施のためのタスクフォースを部門横断的に組織し、アセアン地域でのキャパシティ・ビルディング活動の窓口として活動を開始しています。

今後はアジア・サステナブル・ケミカル・セーフティ構想を推進する経済産業省とも連携をとりながら、アセアンに根差した頼られる日化協を目標にこの活動を推進していく予定です。



タイ日系化学企業へのヒヤリング

『子ども化学実験教室 in ふくしま』 開催報告

「夢・化学-21」委員会は、6月14日(土)、15日(日)の2日間、主に小学生を対象とした化学実験体験イベント『子ども化学実験教室 in ふくしま』を福島市子どもの夢をはぐくむ施設「こむこむ」(福島県福島市)にて開催しました。

「夢・化学-21」委員会は、未来を担う子どもたちに化学や化学産業に興味を持ってもらうことを目的に実験体験イベント『子ども化学実験ショー』等の体感実験教室を1995年より毎年開催しています。2012年からは、より多くの子どもたちに化学の面白さを体験してもらおうと、それまでの東京だけでなく、地方都市でも開催しており、今回は福島県で初めて開催しました。

会場の「こむこむ」は、プラネタリウムや2万8千冊を超える児童書を備えるライブラリー、様々な体験設備を備えた、楽しみながら学べる教育文化複合施設です。本化学実験教室は、「こむこむ」の1階の広場において開催し、初日、2日目あわせて1,200名(保護者の方を含む)という大勢の方々にご来場いただきました。

福島県に工場・研究所を有する企業グループにご協力いただき、生分解性プラスチックを使った実験とそれを使ったマスコットづくり、蛍光材を使った光るスライムづくり及び服についたさまざまな汚れを落とす実験のブースを出していただきました。開始早々からあまりの盛況ぶりに、急遽当協会としても特設ブースを設置したほどでした。結果的に、大きなトラブル等もなくどのブースも毎回満員で、実験をした子供たちには笑顔があふれていました。

なお、本年は、8月2日、3日に東京にて「夏休み子ども化学実験ショー」、10月18日、19日に大阪で「化学の日子ども化学実験ショー」を行う予定です。



生分解性プラスチックでマスコットを作ろう
(昭和電工株式会社)



光るスライムをつくってみよう(日本化成株式会社・株式会社三菱ケミカルホールディングス)



服についた汚れを落とそう
(保土谷化学工業株式会社)

Index

日化協 第23回 定時総会が開催されました。	2
小林会長就任のご挨拶	4
安全表彰、技術賞、レスポンシブル・ケア賞の表彰式を実施	5
from Members [第69回]	6
保土谷化学工業(株) 取締役兼常務執行役員 湯沢 和好さん	8
RCの現場を訪ねて 日本化学工業(株) 福島第二工場 三洋化成工業(株) 京都工場	8
日化協シンポジウム2014	10
6月2日に「第8回レスポンシブル・ケア賞」の受賞講演が行われました	11
平成26年度安全シンポジウムを開催	12
RCLG会議	14
APRO会議とカンボジアRC普及セミナー	15
ICCA理事会、シンポジウムを開催	16
GPS/JIPS推進キャンペーン・GPS/JIPS混合物リスク評価ワークショップ	18
TOPICS	19
RC委員会だより	20

R C 委 員 会 だ よ り

☆会員動向 (会員数：110社 2014年7月末現在)

入会

- ▶ クラリアントジャパン株式会社 (2014年5月21日付)
- ▶ セラニーズジャパン株式会社 (2014年7月10日付)

☆行事予定

- 9月25-26日 リスクコミュニケーション研修 (大阪)
- 10月14日 会員交流会 (名古屋)
- 10月21-22日 RCLG会議 (イギリス・ロンドン)
- 11月5日 地域対話 (大阪地区)
- 11月14日 地域対話 (山口東地区)

表紙写真の説明

川沿いから見た宇部・小野田地区の化学プラント

プラントの明るい照明が、美しいイルミネーションのように夜空に浮かび上がって、地域を照らし出しています。

宇部興産様提供

編集後記

●● この時期、朝の通勤時の風景が様変わりします。学校が夏休みに入ったのです。ここは東京メトロからJR京葉線への連絡駅。東京ディズニーリゾートを目指す家族連れで早朝からにぎわうのです。もしもしJR乗換はこちらの出口じゃありませんよ。

●● 来る10月23日は「化学の日」です。モルの粒子数[6.02×10^{23} (アボガドロ定数)]にちなんでいます。米国では1980年代に「モルの日 (Mole Day)」として定められ、モグラ (Mole) のゆるキャラが活躍する割と知られた記念日らしいです。日本でも昨年10月に設定されましたので、今後は広く世間に知られる記念日となつて、化学の認知度向上に一役買ってほしいものです。

UD FONT
by MORISAWA

